2020 年度外国語学部 FD 活動報告

（英米学科、スペイン・ラテンアメリカ学科、フランス学科、ドイツ学科、アジア学科）

2020 年度、外国語学部では FD 活動の取り組みとして、FD 研修会を 1 回実施した。

6 月 10 日に開催された「初習外国語教育におけるオンライン授業の成果と課題」と題した FD 研修会では、学部構成員のオンライン授業運営上のスキル向上をめざし、本学部の松川雄哉先生（フランス学科）・水守亜季先生（ドイツ学科）・鈴木史己先生（アジア学科）を講師に迎え、コロナ禍で一気に開始されたオンライン授業についての成果と課題について講演頂いた。講演後の質疑応答でも活発な議論が交わされ、有意義な機会となった。参加者は 44 名であった。

例年通りであれば、年 2 回の外国語学部主催の FD 研修会を予定していたが、外部講師の選定などに手間取り、上記 1 回のみとなった。これに関しては次年度に改善したい。

各学科の FD 活動の詳細は、以下の通りである。

英米学科

＜当初の計画＞

1）学科が管理する LL 施設について、2020 年度夏に予定されている設備更新を踏まえて、施設の有効利用および今後の活用方法について検討する小委員会の活動を継続し、それぞれの方針を決定する。

2）学科内ミニ FD の実施も含めて、学科内 FD 活動をさらに充実させる。

3）学科内に専門の小委員会を組織し、学科カリキュラムと有機的に結び付けた視点から長期の派遣留学生数の維持および更なる増加を図る方策の検討を行う。

4）過年度と同様、学科内に専門の小委員会を組織し、学科必修科目の内容および評価の標準化の努力を継続する。

＜報告＞

2020 年度はコロナ禍の影響のため、当初の計画の幾つかは修正を余儀なくされた。そのような状況であったが、以下の FD に関連する活動・議論が行われたことを報告したい。

1）11 月 4 日と 11 月 11 日の二日にかけて、コロナ禍のため LL 教室を使用できない 1 年生を対象にした Call ワークショップを開催した。講師はショーン・トーランド先生で、希望者のみの参加にもかかわらず、学年全体の三分の一にあたる 50 名以上の参加があった。

2）2021 年度から学科英語科目の Academic English A（1 年次生履修）に 2 名の TA が付くことが認められた。それぞれの TA の勤務は週 1 回だが、教員とは違う視点で学生の質問に答えてくれることが期待される。

3）学科必修科目の内容や評価基準については、「Academic English A」及び「Academic English B」のそれぞれの科目コーディネーターを中心に、共通テキストの見直し作業などを行っている。また、持続可能な学科のカリキュラム運営を実践するため、学科必修・選択科目の開講時期や追加・閉講すべき科目の見直しなど、学科教員間で話し合いが為されることもしばし

ばあったので、今後のカリキュラム改革にいかしていきたい。

4）2020 年度も英米学科の幾つかの科目で COIL を利用した授業が行われた。具体的には、Academic English B, Special Topics in English: International Studies, 異文化コミュニケーション、演習などの科目である。2020 年度はコロナ禍のため、海外フィールドワークや国際センターを介しての交換留学も中止せざるを得ない状況になったが、COIL のようなオンラインでの国際交流を今後もう少し取り入れるようにしたい。

5）2020 年度は学科主催の講演会を二つ実施した。一つはミシガン州立大学教授のフランク・ラヴィッチ氏による生殖に関わる個人の公民権と司法の関係性についての講演であり、もう一つはコミュニケーションスキル協会代表の野中アンディー氏による英語プレゼンテーションに関する講演であった。二つの講演会ともに、学生だけでなく教員の FD という観点からしても実りある内容であった。

スペイン・ラテンアメリカ学科

1） 2020 年度は、新たに 2 名の教員を学科に迎えた。1 名は外国語教育センターの科目を中心に、もう 1 名は学科科目を中心に担当した。いずれも専任職のポストに就くのが初めてであったにもかかわらず、コロナ禍という困難の中、業務を始めざるを得ない状況に陥ったが、他の学科教員のサポートを受け、大きな支障なく学科運営に参加することができた。

2） 学科科目の運営については、例年通り、学科長・学科内教務担当者・スペイン語教育コーディネーターの三者を中心に、各種調整にあたった。昨年度末から今年度初めにかけては、学科全体がコロナ禍の状況に対処するため、数々の非常時対応に迫られた。しかしながら、学科必修スペイン語科目および選択科目（スペイン専攻）／選択必修科目（ラテンアメリカ専攻）のポルトガル語科目については、スペイン語教育コーディネーターが中心となって、非常勤講師を含むすべてのスペイン語およびポルトガル語科目担当教員への Zoom 使用方法に関するレッスンセッションを行い、これにより、授業開始後も比較的スムーズに授業運営が可能になった。学科必修スペイン語科目については、例年通り、スペイン語教育コーディネーターと学科教務担当教員の連携の下、年間の授業計画を策定し、実行した。コロナ禍の中、スペイン語教育コーディネーターが、非常勤講師との相互にやりとりする機会を持ち、さまざまな意見をくみ上げ、それを授業計画に反映させたのも例年同様である。学科必修スペイン語科目以外の学科科目については、履修上の問題が生じたり、各科目担当者や当該科目を履修している学生からの問い合わせ等があったりした場合、学科長および学科内教務担当者が、迅速に問題解決ができるよう適宜対応した。

3） 新カリキュラムによる履修を行ってきた 2017 生が 4 年次生になったことに伴い、今年度より学科必修科目「研究プロジェクト」が始動した。初年度なので試行錯誤が続いている部分はあるが、学科会議において各ゼミで共通して当該科目に適用すべき条件等を検討、実施した。

4） 選択必修科目の「海外フィールドワーク B」（メキシコ）も、コロナ禍のため、実施するこ

とができなかった。一方、同じく選択必修科目である「海外フィールドワーク A」については、派遣先であるサラマンカ大学（スペイン）国際コースの協力を得ることができ、初のオンライン実施に至った。同時に、例年参加しているサラマンカ大学日西文化センターの催し「文化週間」についても、学科担当教員の指導とサラマンカ大学で日本語を学ぶ学生の協力の下、学科学生がビデオクリップを作成し、その上映会という形で参加を果たして好評を得た。

5) 近年継続して教員交流を進めてきた輔仁大学（台湾）スペイン語学科と行ってきた教員の相互派遣は、2020 年度はコロナ禍のため、残念ながら実施することができなかった。

6) 学科主催あるいはラテンアメリカ研究センターとの共催の講演会・研究会については、年度前半はこれもコロナ禍のため、実施することができなかったが、年度後半については、Zoom を用いたオンライン講演会の形で、通訳・翻訳、ラテンアメリカの古代文明等、さまざまなテーマに触れる機会が提供された。また、学部の「国際キャリアを考える特別プログラム」、在外公館派遣員の説明会、大学院生のためのキャリア就職セミナー（学部生も参加可）、本学科卒業生が参加して外務省の ODA について紹介する講演会など、学生に国際社会で働くことを考えさせるイベントに学科教員が積極的に関わった。

7) 1 年次生対象の学科必修科目「スペイン・ラテンアメリカの文化入門 A/B」（学科教員によるオムニバス形式）は、Zoom による授業実施という例年とは異なる形態で行われることを踏まえ、各科目のコーディネーターを中心に、科目テーマの検討、教員間との事前調整、試験問題作成方法・レポート内容や提出にかかわる見直しや成績評価決定のための調整が綿密に行われた。

8) オープンキャンパスは、オンライン実施となったので、ここ 2 年実施した「スペイン・ラテンアメリカ学科教員によるラテンアメリカ音楽ミニライブ」は開催できなかったが、期間中計 5 回の学科説明会を実施し、4 名の学生に学科説明会に参加してもらったり、模擬授業 1 回を提供したりして、本学科が対象とする地域の言語や文化、事情等の紹介を通して、学科の情報宣伝活動を行った。

フランス学科

1) 2020 年度はクォーター制導入 4 年目に当たるため、学科内において定期的にミーティングを開催し、各専攻のカリキュラムに適した授業内容を配置するとともに、科目登録・授業運営等に問題がないか検証した。また、フランス語科目に関しては、担当の非常勤教員を含めて教科書の使用法や授業の進め方について意見を交換し、授業運営の検証・改善を図った。

2) 履修ガイダンスや学び方講座の開催、オフィスアワーの設置、学科ウェブサイトや SNS の充実などを通じて学生の履修指導、留学支援、学習支援を行った。

3) 新カリキュラムの海外フィールドワークは 2018 年度より発足し、リヨンカトリック大学とオルレアン大学での短期語学研修を実施する予定であった。しかし、2020 年度は新型コロナウイルス感染症の世界的な流行に伴い、語学研修の実施を断念せざるを得なかった。代替科目

として「フランス語ワークショップ」のコマを増やして対応した。

4) フランス語教育促進のための学生によるフランス語劇は 12 月に上演を行った。また、日仏会館主催によるフランス語コンクールでは本学科の 4 年次生が第一部門（上級）で「パリ生活社賞」に選ばれた。

5) フランス語教育の効果を測定し、その結果をさらに教育に活かすため、実用フランス語技能検定や TCF などの外部語学試験の団体受験を推奨した。

6) 学科の Facebook の更新、今年度は、オープンキャンパスや高校におけるオンライン授業などにおいて広報活動の活性化にも努めた。

ドイツ学科

1) 2020 年、クォーター制は 4 年目を迎え、学科でも議論が行われた。その中でメリット、デメリットなどが話し合われ、これからのカリキュラム編成に生かされることになった。

2) ドイツ語教育のクオリティーおよび教員の資質向上のため、主に外国語科目を担当する教員を中心として、定期的に授業の進捗などについて情報共有、意見交換を行うことで、教員間の密接な連携を図った。その連携には学科専任教員だけでなく、外国語教育センター所属の教員も加わり、学生の学習状況全体に目配りが届くよう努めた。

3) ドイツ学科主催講演会として、河崎靖先生（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）による「ナチスに抵抗した聖職者たちープロテスタントを中心にー」と、武井彩佳先生（学習院女子大学国際文化交流学部教授）による「抵抗はどこまで可能だったのかーその現実と戦後の解釈ー」を開催した。両氏は国際的にも活躍されており、学生はもとより教員にとっても新しい知見を得る重要な機会となった。

4) 学科ホームページを通じて、学科独自の情報発信に努めた。

5) 学生の勉学の支援、成果発表の場として本学科が他の教育機関等と連携して行っている一連の催しは、例年同様、2020 年度も盛況を呈した。11 月に開かれた「南山大学ドイツ語弁論大会」では、本学の学生が 1・2 位を獲得し、「南山大学ドイツ語オーラル・インタープリテーション大会」でも、1 位・3 位・4 位を獲得するなど、他大学の学生も多数参加する中で上位のほとんどをドイツ学科生が占めることなった。また、ヨーロッパ言語共通参照枠に準拠したドイツ語能力検定試験(A2/B1/B2）は、日本で各自申請して受験した。そのため、例年よりは受験者数が少なくなったものの、A2 は 4 名、B2 は 2 名、独検 2 級は 4 名が合格した。この他、12 月に開催された第 20 回名古屋圏国公私立大学インターゼミナール（総参加者数 102 名）に中屋ゼミ生 11 名が参加した。各自ドイツ・EU 経済に関する卒業研究に向けた内容を発表し、他大学学生と活発な議論を行った。なお、最後に当日の印象に残った発表のアンケート投票が行われ、中屋ゼミ生が最多得票を獲得した。

アジア学科

1) 学科必修科目とりわけ外国語科目と演習科目について、前年度から継続して学科会議や担当

者ミーティングの場でその運用状況を報告するとともに、評価できる点と改善すべき点について意見交換をおこなった。

2）Zoom によるオンライン授業の運営方法について、宮原准教授を中心に Zoom ミーティングの設定や活用法などを学科で周知するとともに、非常勤講師に対しても情報共有をおこない、円滑な授業運営の実現に努めた。

3）Zoom で実施したオンライン授業について、学科会議の場で学生の反応や授業の進め方、成績評価の仕方について意見交換をおこなった。

4）学科教員間および学科教員と非常勤講師の間で連携をとって、授業における学生の様子を随時把握しながら、Zoom やメール、SNS を活用するなどして必要に応じて学生指導をおこなった。

5）学科作成ホームページに、今年度も幾つかの学科科目を紹介する欄を追加した。そこに掲載するために受講生に依頼した紹介文をもとに、当該科目に対する学生の評価を確認した。

6）1 年生を対象に 2021 年度海外フィールドワーク説明会を対面で実施した。一部の学生にはオンラインでも参加できるよう配慮した。

7）海外フィールドワーク不開講にともない参加できなかった 2 年生を対象に、輔仁大学の学生と SNS で交流するプログラムを試行した。テーマの設定やグループ分けの仕方、活動の見守り方など今後の継続に向けて参考になることが多かった。また、非常勤講師のネイティブ教員を講師に迎えてオンラインでジョグジャカルタヴァーチャルトラベルを企画し、実施した。バティック染色の体験もあり、参加した 2 年生にとっては異文化に触れる貴重な経験となった。

8）キャリア教育の一環として、1 年生を対象とする学び方講座を Q1 に、2 年生を対象とするキャリア入門講座を Q3 にそれぞれオンラインで実施した。

以上